

# 淡路島 - 自然のちからを活かした緑花 [I]

— 半自然草原をつくろう —



2011年3月

兵庫県淡路県民局

# まえがき

淡路県民局では、平成17年度に「あわじ花回廊計画」や「淡路花博」の理念を継承し、島民主体による緑花活動の指針となる“あわじ総合緑花プラン”を策定し、「淡路らしい緑花づくり」「持続可能な緑花づくり」に取り組んでいます。その一つとして、自生植物を用いた淡路らしい緑花に関するパンフレットの作成を進めています。

まず、淡路島が本来もつ自然の姿＝淡路らしい緑花風景を知るために「淡路に自生する美しい花」、「美しい淡路の花と緑」を作成しました。つづいて、淡路島本来の自然を手本とした自生植物を活用した緑花づくりを紹介する「淡路島を自然公園島に〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕」を作成しています。

そこで今回は、淡路島の豊かな自然の宝庫である里地に焦点をあて、その地域の自然植生の力を活かした緑花づくりを紹介するパンフレットを作成しました。

淡路の緑花に関わる人々が、自然植生の美しさを再認識するとともに、それを日常の緑花活動に具体的に活かすことにより、花と緑いっぱいの美しい環境立島「公園島淡路」の実現につなげていただきたいと思います。

2011年3月

兵庫県淡路県民局長 長棟 健二



兵庫県立淡路景観園芸学校（兵庫県立大学淡路キャンパス）の草原再生実験地で咲いたヤマハッカ（シソ科）  
2009年11月にキャンパス周辺のあぜでタネを採取。12月にタネ播きをして苗をつくり、2010年6月に  
実験地に植え付けた。（2010年10月撮影）

## ■ 自然を活かした“緑花”はいかが？ ー草刈りで作るお花畑ー

里の道路の脇では年に数回くらい、雑草や低木類の刈り取りがおこなわれます。このような刈り取りをする場所には、いつしか道路に沿った細長い“草原”ができあがります。この細長い草原は、じつは野草の宝庫なのです。

農地に沿った道路の脇では、あぜ（コセ）の草原とおなじような植物が生えてきます。チガヤやネザサが一面にひろがり、そのあいだにキジムシロ、ミヤコグサ、リンドウ、オミナエシ、ツリガネニンジンなど、色とりどりの草花が季節ごとに咲き競います。このような草原を「半自然草原」と呼びます。

樹林沿いの道路の脇では、林のへり（林縁）にキカラスウリやセンニンソウなどのつる植物、ホタルブクロ、イナカギク、ウドなどの草花がみられます。マツ林のそばならコシダやウラジロなどのシダ植物が群生してるかもしれません。このような林のへりにできる植物群落を「そで群落」と呼びます。

条件がよいところでは、ただ草刈りをするだけで、こうした「お花畑」ができあがります。「人間による草刈り」と「自然の回復力」のコラボレーションでできあがった半分自然のお花畑です。

「半自然草原」や「そで群落」のお花畑にはメリットもあります。花壇のような設備を作らないので造成のコストはゼロ。肥料や水やりや草引きはいらないので管理のコストは最小限、草刈りのコストのみです。そして、もともと地域にいる生物で構成されるので、生態系への悪影響がありません。

自然豊かな里地では、草刈りでお花畑をつくってみませんか。せっかくの半自然草原やそで群落をつぶして花壇をつくるのとはちがい、自然を活かした生き物にやさしい方法です。



オミナエシ



イナカギク



ツリガネニンジン



リンドウ



キカラスウリ

## ■ 草刈りだけではうまくいかない場所では「小さな自然再生」をしてみよう！

条件のわるいところでは、残念ながら草刈りをしていただけではこうしたお花畑ができません。条件のわるいところとは、たとえば、セイタカアワダチソウやネズミムギなどの外来植物が一面に生えてしまい、在来の野草がみられないような場所です。道路の付け替え工事や拡幅工事、大規模な圃場基盤整備をした場所では、そんな状況になっていることが

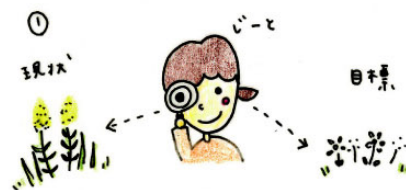
多いです。また、草刈りをやめて数年放置した場所は、うっそうとしたヤブになって、多様な植物が絶えていることがあります。草刈りで多様な草花が復活することもあります。なかなか種類が増えない場合もあるでしょう。

そういう場所では「小さな自然再生」をしてみませんか。ここでは、そのヒントを紹介します。

### 「小さな自然再生」のヒント

#### ① 「小さな自然再生」をしたい場所の問題点を把握する。

まず、“緑花”したい場所を観察し、問題点を把握します。外来植物の繁茂が問題でしょうか。それとも、一度ヤブになったために、草花の種類が単調になってしまっているのでしょうか。できれば、生えている植物のリストもつくっておきましょう。



#### ② 「目標植生」を設定し、そのモデルとなる場所をよーく観察する。

“緑花”したい場所が農地沿いなど、開けた所なら「半自然草原」を目標とします。林のへりなら「そで群落」を目標にしましょう。そして、近隣で「モデル」になりそうな「半自然草原」や「そで群落」を見つけ、よーく観察します。花は季節ごとに移り変わっていくので、観察は季節ごとに1年くらいつづけましょう。モデルとした草原に生えている草花のうち、外来種でないものが“緑花”に活用できます。タネをつけていれば、ラッキー。そのタネを集めておきましょう。



#### ③ 「外来種の駆除」と「在来種の導入」をする。

外来種の繁茂が問題であれば、駆除をしましょう。完全な駆除は難しいので、密度を下げることを目指します。ネズミムギのような1年生の植物の場合は、結実期の直前に刈り取ってしまえば、翌年以降の発芽がすくなくなります。セイタカアワダチソウのような多年草では、夏場を中心に年3回くらい刈り取りをするか、抜根除草をすることで、弱らせることができます。



在来種の導入もおこないます。集めたタネを直接播いてもよいし、苗をつくって植え付けてもかまいません。タネ播きは手間がかかりませんが、定着率は低いです。一方、苗をつくって植えるのは手間はかかりますが、定着率は抜群です。なお“遺伝子の多様性(地域性)”をまもるために、導入するタネは植える場所の近所で採ったものに限ります。

#### ④ 「小さな自然再生」ができているかよーく観察する。

外来種の駆除と在来種の導入を数年つづけながら様子を見ましょう。生えている植物のリストを季節ごとに作り、「小さな自然再生」の成果を確認し、うまくいかないときは原因を考え、方法を改善していきましょう。

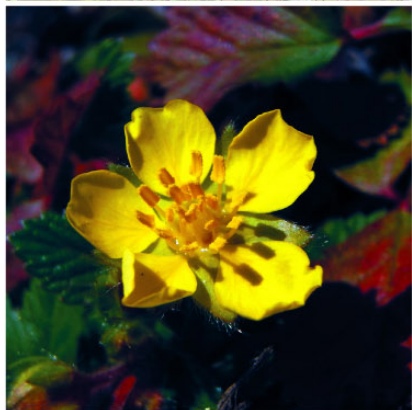
自然を観る目がだんだん肥えて楽しみが増えてきますよ。





▶ **チガヤ** (イネ科の多年草)

5月～6月に白い綿毛のような穂をつけます。でたばかりの穂は銀色にかがやいてとてもきれいです。1年に2～3回くらい草刈りをされるような場所を好み、コセやため池の土手などに一面にひろがります。導入するには、6月に穂をとってきて、穂のまま播種すれば簡単。少し覆土をするとよく定着するようです。冬に株や地下茎を移植しても導入できます。



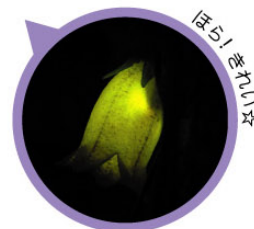
▶ **キジムシロ** (バラ科の多年草)

3月～4月ごろに花を咲かせます。コセなど、年に3回くらいの草刈りをされる場所を好み、背の低い草ですが、春先、草がまだ茂っていないところに黄色い花が目立ちます。半自然草原の代表的な草花です。タネは4月～5月ごろ。



▶ **ホタルブクロ** (キキョウ科の多年草)

林縁のそで群落に生えることが多いです。6月～7月ごろ、ほんのり赤みがかった白い花を咲かせます。ちょうどホタルがとぶころに花を咲かせます。花の中にホタルをいれるととてもきれいなランプになります。タネは夏～秋。



▶ **タツナミソウ** (シソ科の多年草)

4月～6月頃に花を咲かせます。花の様子が泡だつてよせてくる波のようなので、立波草です。キジムシロと同じように背の低い草で、年に3回くらいの草刈りをされる場所、明るい草原を好みます。タネは5月～6月ごろに採れます。



▶ **セイトカアワダチソウ** (キク科の多年草・外来種)

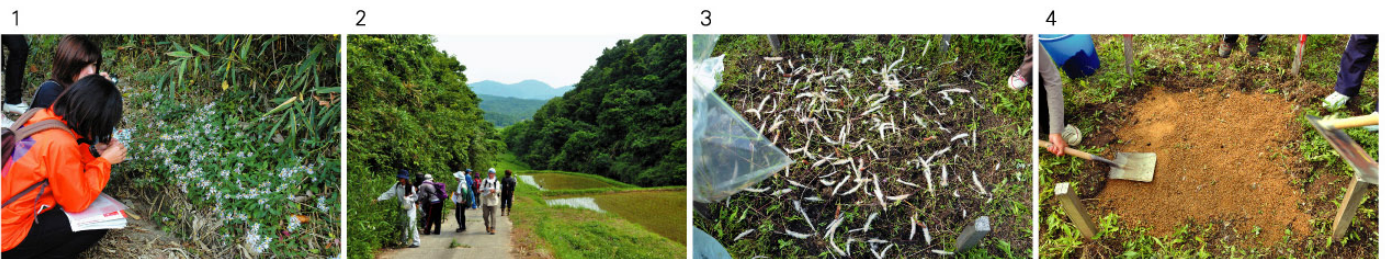
北米原産の外来植物です。造成地や耕作放棄地などに一面にひろがり、ほかの植物を圧倒します。年3回くらいの草刈りを毎年繰り返すとだんだん衰退していきます。年3回のうち1～2回は真夏に刈ると効果的です。狭い範囲ならば、抜き取るのもよいでしょう。花は秋に咲きます。

## あ と が き

淡路に自生する植物を活用した“淡路らしい”緑花を考える際に、園芸手法では対応することが難しい里地、里山の道路沿いや農地の畦畔等では、その地の自然植生の力を活用した緑花を考えていく必要があります。そこで、里地で自然を活かした緑花＝半自然草原づくりの研究を行っている兵庫県立淡路景観園芸学校（兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科）に原稿作成を依頼しました。

今回は、沿道や農地の畦畔で年に数回おこなわれている雑草や低木類の刈り取りを活用した“お花畑”や“小さな自然再生”に取り組むことにより、普段見なれた地域に自生している緑花の美しさを再認識していただけたと思います。

このパンフレットが、淡路島の気候風土にあった自然植生の力を活かした緑花づくりの参考となることを願っています。



このパンフレットで紹介した「小さな自然再生」は、2009年の5月から、兵庫県立淡路景観園芸学校（兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科）で、授業の一環として実験的に取り組んでいるものです。学内の外来植物だらけの造成斜面に、近隣の半自然草原から採ってきたタネを播き苗を植え、少しずつ淡路島らしい草原をつくっているところです。

表紙の写真はその過程です。また、まえがきの下のヤマハッカの写真はその成果の一端です。

表紙に使った写真（上に掲載）

1. そで群落に群生する野菊を観察しているところ
2. 草原づくりのためのタネをあつめているところ
3. タネを播いたところ。穂のまま播いたチガヤのタネが目立っています
4. タネを播いたあとに少し覆土したところ。タネをただ播くだけよりもよく定着します

文・写真：澤田佳宏（兵庫県立淡路景観園芸学校／兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科）

イラスト・デザイン：中込千尋（兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科）

発行：兵庫県淡路県民局 洲本土木事務所まちづくり課

tel 0799-26-3213

（本書掲載の記事・写真について無断転写・複製を禁じます。）